胡蝶の会

ＡＴＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶の会

【Ｎコード】

Ｎ９８６２Ｌ

【作者名】

ＡＴＵ

【あらすじ】

星新一氏をリスペクトした、フリージャンルショートショート小説です。

1：死因の会（前書き）

星新一氏に激しく憧れて、ショートショートを書いてみました。

思ったより大変なので、定期更新は難しそうなので、お気に召したらたまに覗いて貰えたら嬉しいですー。

1：死因の会

宇宙よりもずっと上の方に、一つの世界があった

人間の魂がたどり着くその場所は、一般的に「あの世」と呼ばれるそれだった

太陽の光も届かないというのにそこは白く、光源があって明るいというよりは、光も影もないといった感じで、平坦な白い地面と白い空がどこまでも続いている

そんな場所に唯一存在する、これまた真っ白な川のほとりに、三人の死者がなにやら集まっている

仮にA、B、Cと呼ぶことにする彼らは、「死因の会」と呼ばれるクラブのメンバーであった

残りの二人を見回して、Aが口を開く

「さあ、これから死因の会のはじまりだ。では、おれから一つ、話させて貰うとしようか」

これだけ真っ白で退屈な世界にいると、死者たちも随分と持て余してしまうらしく、いろんなクラブやら集まりがあの世には存在している

この「死因の会」も、面白い死に方をした死者たちが立ち上げた、自分の死因について大いに語るという、へんてこな集まりであった

Aは話を続けた

「おれは生前、結構に名の知れたボクサーだった。なかなかきれいな奥さんを貰い、それは充実した人生だった」

「成る程、幸せな人生に訪れる悲劇。わくわくしますな」

Bが身を乗り出して相槌を打つ

「本当に、そうですねぇ。私なんぞ、普通のサラリーマンでしたから、うらやましい人生だ」

Cも目を細めて頷いている。Aは気分が良くなって、さらに大きな声で話を続けた

「いや、おれはリングの上で華々しく死んだわけではない。家内の浮気が原因だったのだ」

Aはまるで怪談でも話すかのように声を低くした

「浮気をしていたのには感づいたが、いかんせん証拠がなかった。それで探偵に調べさせたら、ずうずうしく家で会っているらしかった。そこでおれは、密会現場をおさえようとした」

「ほう、なかなかドラマチックじゃないですか。しかし、あなたが死ぬ理由が、まだはっきりしてきませんね。浮気相手や奥さんを殺してしまったならともかく」

「まあ、最後まで聞いてみましょう。きっと我々の驚く展開が待っ

ていますよ」

Bをたしなめるようにが言う

「まあ聞いてくれ。おれはある日、妻に外出するとうそをついて、密会現場に押し入ったが、肝心の相手がいなかったんだ。多分、逃げた後だったのだろうな。だが、おれは妻を激しく追求し、威嚇のつもりで、側にあったサンドバッグを、窓の外に放り投げた。ところがのぼせた頭でいきなり力を出したから、そのショックでポックリと…」

その話を聞いたBが、驚きの声をあげた

「なんと、そうだったのか。いや、実にこの世は狭い…」

「どういうことだい？」

Aが不思議そうな顔をした

「いや、わたしは生前、ある女と浮気をしていたのです。いつものように夫の外出中にその人の家に行くと、いきなり旦那が帰ってきたのです。それで、とっさにわたしはサンドバッグの中に隠れました。そしたら…」

Aは目を丸くしていた

「なんと、まあ、そうだったのか…これは悪いことをした。本当に、この世は狭い。一つここは、お互いに水に流して、この縁を大事にしようじゃありませんか」

Bは安堵の表情で、Aに握手を求めた

「そう言って貰えると、非常にありがたい。いや、縁とは本当に不思議なものです…」

Aが、申し訳なさそうにCに言った

「すみません。あなただけをかやの外に出してしまったようだ。さあ、あなたの死因を聞かせてください」

「ええ、ある日わたしがジョギングをしていたら、急にサンドバッグが落ちてきまして…」

1：死因の会（後書き）

頭が足りない…

という訳で、なんかどこかで聞いたような話になってしまったのは、星氏をリスペクトし過ぎたのでしょうか

多分また書きます

では

2：鳴かない鳥（前書き）

不定期と言いながらこの更新のはやさ…

他に連載してる小説もあるのに、こっちばかり思いつくんです

2：鳴かない鳥

西暦２３００年、地球は大きな変貌を遂げていた

銀色の金属で覆われた地面には隙間なく銀色のビルが立ち並び、道路は空中につくられている

抜けるような澄み切った空は、紫外線などから地球を守る特殊フィルムに映されたものだったし、人間以外の動植物は既に絶滅していた

酸素などは機械で作り出せるし、生産性の向上で人類は殆ど働かなくても良くなった

そんな街では、何か珍しいものを持ち寄り、それでひまをつぶすのが、密かな流行になっていた

そんなことに人一倍熱心だったＡ氏のもとに、ある日一つの品が持ち込まれた

「おや、また珍しいものを持ってきたんだな」

Ａ氏は品を持って来た男を、客間に招き入れた

男は、ピンク色をした何かを、両方の手で大事そうに抱えていた

「Ａさん、これは“とり”という、大昔にいなくなったものです」

男は椅子に腰掛けるなり、うやうやしくそう言った

「成る程、わたしも初めて見るものだ…」

そう言ってA氏は、ポケットから小さな機械を取り出した

これは万能電子辞書で、言葉の意味から図鑑まで何でも載っていて、今の人はみんなこれに頼って生活しているものだ

A氏は辞書のボタンをいくらか弾いて、それからまた“とり“を見た

「ふむ。“鳥“というのは、とてもきれいな声で鳴くという。ぜひとも聴いてみたい」

A氏は“とり“を指でつついたが、なんの反応も返ってこない

「鳴かないな…しかし、電子辞書にも、鳴かせる方法は書いていない。何しろこの“鳥“というやつは、数百年も前に絶滅してしまったものだから、辞書にも詳しく載っていないのだ」

そこでA氏は、知り合いの学者を数名呼んで、“鳥“を鳴かせようとした

A氏のもとに来た学者は、みな自分の電子辞書とにらめっこをしながら、様々な方法を議論した

「“鳥“は仲間を呼ぶために鳴くという。小突いてみるのが一番だ」

「まて、わたしの辞書には、縄張り意識で鳴く、と書いてある。広いところへ放してみたらどうだろう？」

「ばか、わたしの辞書はカーキ社製の最新型だぞ。餌だ、餌をやればいいんだ」

議論はいっこうにまとまらず、一人の男がこう言った

「そうだ、この近所に、昔ながらの生活をしている変わり者がいるらしい。そいつに聞いてみたらどうだろう」

その男はすぐにA氏の家に招かれ、男はこう言った

「あ、それはわたしのです。先日、盗まれて困っていたのだ」

男は喜んで“とり“をひっつかみ、帰ろうとした

A氏は彼を呼び止めた

「待ってくれ。“鳥“というのは、とても素晴らしい声で鳴くという。ぜひ、聴かせてもらえないだろうか？」

男は一瞬呆然としたが、すぐに承知してくれた

「そういうことでしたか。おやすいごようです。では、少し目をつ

むっていて下さい」

すぐに目を閉じた一同の耳に、「カーン」というとても響く音がこだました

「おお、なるほど。想像とは少し違ったが、悪くない。どうもありがとう。どうかお気をつけて」

そして男は、A氏に笑顔で送りだされた

家に帰った男は、呆れた顔でぼやいた

「やれやれ、最近のやつらときたら、辞書を片手に知ったかぶりをして、自分では何も覚えていないらしい…」

男はさっさとほうきで床を掃き、取っ手のついた平たい“とり“でごみを集め、ごみ箱にすてて、さっさと掃除用具入れに放り込んでしまった

2：鳴かない鳥（後書き）

今回のオチは、なんとなく星氏のそれと近いような感じで、とても満足

いまあるアイデア2つを使い切ってから不定期更新にしよっかなと思いますー

3：区別

ある大学の講義中、一年生のA男は、講堂の端にひとりで席に座り、熱心にメモをとっていた

特に単位が危ういわけでも、かといって勉強好きなわけでもない

まだ来ていない友人に、講義内容のノートのコピーをさせて、小遣いを稼ぐためである

その友人、B太が遅れて講堂に入り、蒼い顔でA男の隣に座った

いつも眼鏡をかけているB太が、今日はサングラスをかけている

「おや、今日はサボりかと思ったのに。途中からくるなんて、どうにもお前らしくないな…それに加え、その蒼い顔。なにかあったみたいだな」

A男が話し掛けても、B太は下を見たままだった

「病院に…行っていたんだ」

「そんなことだろうとは思ったよ。なんだ、具合が悪ければ、帰ればよかっただろう」

下をみたまま、つぶやくように話すB太を見て、A男はメモをとるのをやめ、そう言った

「いや、身体はたぶん大丈夫なんだ。いたって健康だ…」

そう話すB太の顔は、依然として蒼いままだ

「だが、病院に行ったのなら、何かあるのだろう？」

B太はやっとA男のほうを向いた。正面から見ると、ますます蒼い顔だ

「俺、区別がつかないんだ」

B太はずいぶん時間をかけて、ようやくその言葉をひねりだした

「ちょっと、詳しく話してくれ」

A男は興味を持って身を乗り出した

「だから、だんだん区別がつかなくなってきたんだ…一週間ほど前からかな、最初は、塩と胡椒の区別がつかなくなったんだ」

「それがどうしたんだい？」

「次の日はスプーンとフォークの区別が、その次は眼鏡とサングラスの区別がつかなくなった」

A男は訳がわからなくなった。たちの悪い冗談だろうか

「区別って、つかなくなるとどうなるんだい？」

「そのままの意味さ。どっちも同じに見えるのだ。塩と胡椒を別に置いていたのに、どちらも塩になっていた。味さえも区別がつかない」

「なるほど、本当のようだな、だが…」

A男は、少し気になることがあった。

「段々と、症状がひどくなっていないか？」

B太もその点には気づいていたようで、狼狽する

「A男、君もそう思うかい？僕も同じことが心配で、今日病院に行ったんだ。だが、誰がそんなことを信じるというのだ…」

B太の言う通り、症状は日を増すごとにひどくなっていった

「やあB太、調子はどうだい」

「ああ、今朝は掛け布団と敷布団を間違えていたらしい」

「B太、まだ治らないのか？」

「Ｗｈｙ？」

「まさか、日本語と英語の区別がつかなくなったのだろうか」

一ヶ月も経つと、B太は学校に来なくなった。噂によると、男と女の区別がつかなくなって、男性と結婚したらしい

何度も病院へ行くことをすすめたが、B太はA男さえも区別がつかなく、とりあってもらえなかった

「おいA男、B太が交通事故で死んでしまったらしい。目撃者の話だと、車とイヌを間違えたとか」

「Ｗｈｙ？」

「なんてこった、やはりこの症状は、病気によるものだったのか……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9862l/

胡蝶の会

2010年10月8日16時12分発行